



TV Animation Series

V O L U M E S I X

©BCE / Project Engage



TV Animation Series Engage Kiss 6





わたし緒方カンナー デーモン中学三年生ー（推定）

まずは愛する家族を紹介するね！

最初はお父さん！ いつの間にか悪魔に最愛の奥さんを殺され、最後は奥さんになりました悪魔に騙し討ちで殺された、緒方イサム！

続いてお母さん！ ある日突然悪魔に惨殺されて、それから数年間ずっとなりすまされていた、緒方サユリ！  
そしてお兄ちゃん！ お父さんやお母さんの死の真相に辿り着くため、悪魔と契約して自分の記憶をなくしながら悪魔退治を頑張る、緒方シユウ！

ついでにわたしの本当のお母さん！ サユリ母さんを殺して入れ替わり、お父さんを騙してわたしを産んで魔界と人間界とのゲートを生み出そうとした、悪魔アスモデウス！

……重い！ 重すぎるよわたしの生い立ち！

でもいいんだ、今はお兄ちゃんも一緒だし。

たった一度の短い人生、前を向いて一生懸命生きなくちゃね！

まあわたしって悪魔だから死なないって話もあるけどね！



「ねえ……」

「つ……」

「ねえってばあ！ 聞こえてるんでしょお役人さーん！」

「じゃ、喋るな！ この悪魔め！」

さて！ そんな惨き悲劇のヒロイン緒方カナナことわたしだけど、その酷すぎる境遇は昔も今も変わってないの。だって、ここがどこだと思う？ なんと、ベイロンシティ市庁舎の地下深く。街の人たちも知らない秘密の監獄の中なんだよ！

周りの壁ぜんぶが金庫みたいなぶ厚い鋼鉄で覆われててさ、お日様の光すら入らないんだから。

「えー、ひつどいその言い方！ ちょっと街を壊したくらいで悪魔呼ばわりとか」

「。街を壊す。って表現がすでにちよつとじゃないのに気づいてくれ……」  
しかもシティのえらい人たちってば、わたしをそんな遣い出る隙もないところに閉じ込めるだけじゃ飽き足らず、わたしの両手を鎖に繋いで、さらに胸に剣を突き刺して完全に動きを封じてる。

これって「ところで今のわたしの状態を見てくれ。こいつをどう思う？」と聞いてみたら、十人が十人「すごく……理不尽です」って答えるくらい理不尽だと思ふの！

「まあいい。それで言いたいことは何だ？ 食事なら買も量も十分……」

「そう！ それなの！ ここにいると食べて寝てばかり！ たまには運動しないと、S級悪魔がD（EBU）級悪魔になっちゃうよ！」

「っ、な、なら食事の量を控えればいいだろ……」

「食べ盛りの中学生にそういうのは違うんじゃないかなあ？ 良く食べ、良く運動し、健全な肉体と精神を育むっていうのが、未来を担う子供に対しての大人の責任だよな？」

「すでに精神の方は破綻してるように見えるんだが……」

「ほらね？ やっぱ理不尽。」

わたしが何を言っても聞いてくれやしない。



and then

Engage Kiss (Volume Six)  
Special novel  
by Fumiko Maruto

丸戸史明

だいたい中学生のわたしにこんな酷い扱いするなんて人権意識ないよねベイロンシティ。

「あのさ、おじさん」

「な、何だ……？」

「ちよつと出かけるから、扉開けて？」

「っ！ 緊急事態発生！ 緊急事態発生！ 囚人00号に脱走の兆候あり！ 鎮圧部隊の出動を要請する！ 繰り返す！ 囚人00号に脱走の兆候あり！」

なんか急に扉の外が騒がしくなった。

赤いランプが点滅し、大きなサイレンが鳴り、たくさんの足音が、まるで地響きのように地面を揺らす。

わたしにはわかる。これは大人の抑圧だ。

若者の好奇心や冒険心を折って、自分たちの都合のいいように操ろうとしてるんだ。

いつでも大人はわかってくれない。

「しょうがない、自分で開けるか！」

……でも、そんな圧力に屈しちゃいけない。

理由なき反抗。こそ若者の特権。

「よせー やめろー おい応援はまだか？ 一刻の猶予もないぞ！」

わたしは全身の力を振り絞り、両手の鎖を引きちぎると、自由になった両手で胸を貫いている剣を抜く。

……まあ最初からやる気になればこのくらいできるんだけどね。

「いっせーのお……」

「全員退避だあああー！ 巻き込まれるぞおおー！」

だって、わたしたち若者には、輝ける未来があるんだから……

# ※ ※ ※

高度数百メートルの空中を飛びながらベイロンシティを見下ろすと、立ち並ぶ高層ビル群がわたしの視界をいちいち遮る。

そのたびに、目障りなビルを片っ端からぶち壊して視界を確保しようと思ったりもするけれど、ぐっところえてビルの隙間を縫うように飛び、地上の景色に目を凝らす。

「お兄ちゃんの部屋、どっちだったっけなあ……」

わたしが探しているのはただ一つ。三階建ての、小さくておんほろな雑居ビル。だってそこには、わたしの最愛の家族が待ってるから。

さつきも言ったと思うけど、わたしには少し年の離れたお兄ちゃんがいる。

……というか、わたしの家族はもうお兄ちゃんしかいない（実のお母さんは生きてるけど魔界に引っ込んでるからノーカン！）。

わたしのお兄ちゃんは、心ならずも悪魔と人間のハーフとして生まれたわたしを、それでも心の底から愛してくれている。

だって、悪魔に連れ去られそうになったわたしを取り戻すために、悪魔に記憶を売ってまでわたしを取り戻そうとしてくれた、裏切り者の名を受けて全てを捨てて戦う男なんだから……

だから兄妹二人、肩を寄せ合ってつつましくやかに暮らしていくのがわたしの夢。

クソ政府がわたしを幽閉したり、下品な女たちがお兄ちゃんを誘惑したりと、世間の荒波は、わたしたちにとっても厳しい。

それでも、家族の絆があれば頑張れる。

だから待っててね？ 今行くからねお兄ちゃん……お兄ちゃま、あにい、お兄様、おにいたま、兄上様、にいさま、アニキ、兄くん、兄君さま、兄チャマ、兄やー！

わたしたち家族を引き裂こうとする邪魔者は、わたしがみんなやつつけて……



「待ちなつてカンナ」

「ほらこういの！」

と、突然、わたしの前に謎の人影が立ちはだかる。

まあ空中で立ちはだかれるのなんて、わたし以外には一人しかいないんだけどね。

「これで二日ぶり三六回目の脱走だよ？ いい加減にしてよー そういうのシュウくんにも迷惑かかるってわからないの!?」

「うるっさいなあ下品な女一号……」

高度数百メートルの空中に浮かぶわたしの前に立ちはだかったのは、わたしと同じ、片翼に片羽の人外女。

自称お兄ちゃんの妄想恋人を名乗る勘違いヤンデレ女、キサラ。

「ほら、大人しく市庁舎に戻るよカンナ？ 警察にも謝って……」

「やだよ。あそこつまらないんだもん」

「しょうがないじゃない、あんたは捕まるだけのことしたんだから」

「そんなことないよー わたし未成年だよ？ なのにあんな酷い扱いなんてないよー これって政府の陰謀だよー」

「確かに陰謀ばかりの政府だけど、あんたの処遇についてだけは向こうが正しいと思うんだよね……」

「うわキサラも政府の味方するんだ……」

「だってあの人たちがカンナのこと何て呼んでるか知ってる？ ペイロンの悪夢よペイロンの悪夢！」

「うるさいこの裏切り者！ 政府の飼犬！ 公務員悪魔！」

「そんな安定収入の仕事があるんなら喜んで尻尾振るから！」

うん、やっぱりこの女とは気が合わない。

別にお兄ちゃんの恋人を勝手に名乗っているからじゃない。それよりも何よりも、同じ悪魔のくせに考え方が根本的に違うのがイラっとくるんだ。

だってこいつは悪魔のくせに、いっつも人間の味方をする。

今まで何度も人間に敵意を向けられたり迫害を受けているはずなのに、それでも悪魔災害から人間を守るた

めに戦い続けている。

口では「シュウくんとの契約だから」とかうそぶいてるけど本質は違う。

あまりに、愛が重すぎる。

お兄ちゃんにだけじゃなく、人間に対しても。

こいつは一体、どうやって生まれて、どうやって育ってきたのか……

「あー、カンナ？ とりあえず抵抗をやめて、大人しく戻ろう？ なっ？」

「キサラ何モタモタしてるのよー 早くカンナを取り押さえないさいよー」

……などと思いにふけていたところ、わたしの背後から、キサラとは別の、スピーカーで拡大された声が風切り音とともに飛んできた。

振り向くとそこには、ビルの隙間でホバリングしているヘリコプターが一機。

そして、その操縦席からわたしを愛おしげに見つめている視線の主……

「お兄ちゃんー」

「シュウくんー」

「私もいるわよー」

そう、わたしに残された唯一の家族。

悪魔に魂を売ってでも妹を助けてくれる世界一カッコいいお兄ちゃん！ 緒方シュウ！

「聞いてよお兄ちゃんー お役人の人たちたらさあー」

「はいはい話はお兄ちゃんが聞くから。待遇に不満があるなら政府に伝えるから。だから今は機嫌を直して……」

ずっと会いたくて心に描いていた人が目の前に現れ、わたしの想いが溢れてしまう。

「お、お、お兄ちゃあああー！」

まるで駄々っ子のように、意味もなく悲しくて、寂しくて、その胸に飛び込んで泣きじゃくってしまいたいそう

になつて……

「ちよつとシユウ、あなたがいつまでもそうやってカンナを甘やかすのがいけないのよ?」

「……あつ?」

ようやく、その操縦席の隣にいる、青髪アヲカミの女の姿が目に入る。

「いやアヤノさん、今はそういう根本的な話は置いて、まずはカンナを落ち着かせた方がさ……」

「そうは言うけど、このまま叱りもせずに帰したって、またすぐ暴れて逃げ出すのがオチよ? 一度きちんとわからせてあげないと……」

「……ちよつとお、お兄ちゃんはわたしに話しかけてんのよ? なに邪魔してくれてんのよ下品な女二号」

「二号って何よ二号って!」

「下品な女。の方は気にしないんだ……」

子供の頃から馴れ馴れしくウチに出入りして、●つも年下のお兄ちゃんを隙あらばと十年以上もしつこく狙い続けていたハイエナ年上女。

自称お兄ちゃんの妄想元カノを名乗る勘違い共依存女、夕桐アヤノ。

「もういい加減にしないさいよカンナ。あなたのその勝手な行いが、どれだけシユウを困らせてるか……」

「いやお兄ちゃん困らせてるのアヤノの方じゃない。とつくの昔にふられてるのにいつまでもしつこくそうやって隣にいられてさあ」

「あ、それは心の底からそう思う」

「キサラあんたどつちの味方よ?」

「だからほら、そうやってみんなしてエスカレートしないでさあ、一度クールダウンして……」

「だいたいキサラもアヤノも、お兄ちゃんにふさわしくないんだよねえ。キサラは悪魔だし、アヤノは年増だし」

「妹が悪魔なんだから奥さんだって悪魔で問題ないでしょ」

「言っておくけどキサラなんかシユウの数百歳年上なのよ? 私とシユウの年の差なんか可愛いものでしょ」

「あたしはずっと封印されてたもん! ていうかいきなり刺さないでよアヤノ」

「ほら結局二人とも反論できないじゃん! はい論破!」

「そ、そんなことないわよ! だってほら、私とシユウって……えいと……そ、そうだ! 私とシユウって体の相性めっちゃいいんだからっ!」

「アヤノさんっ!」

「アヤノのおおお!」

「あああつ! それ家族の前で絶対言っちゃいけないやつ……」

うん、やつぱりこの女たちとは気が合わない……

※ ※ ※

「ほらお兄ちゃん、お肉焼けたよ? はい、あーん」

「う、うん、ありがとうカンナ……」

「……………」

「……………」

網の上でこんがり焼き上がったお肉を、緒方家特製のタレにつけて、お兄ちゃんの口元へと運ぶ。

「どう美味しい? まだまだあるから、たっくさん食べてね?」

「そ、そですわね」

「……よくもまあ、こんな状況で呑気に肉が焼けるわよね」

「……ついさっきまで、街を焼き尽くそうとしてたくせに」

「うっさいなり、運動したらお腹がすくのはあんたたちだって同じでしょ?」

ここはセントラルの市庁舎近くにある公園。

さっきまで決死の空中戦を演じていたわたしたちは、「戦い終わったらノーサイド」の精神にのっとり、今は打ち上げのパーベキューを楽しんでいる。